

国際補助語としてのエスペラントと中立性

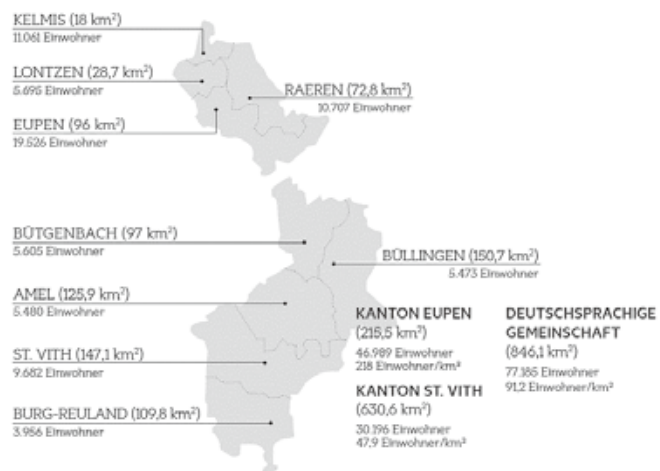
—— ドイツ・ベルギー国境地帯の 複言語的状況の特殊性に着目して ——

黒 子 葉 子

1. はじめに

ドイツとオランダとルクセンブルクに国境を接するベルギー東端部には、ドイツ語を母語とする少数住民が暮らしている。地理的には北部のオイペン郡 (Kanton Eupen) と南部のザンクト・フィート郡 (Kanton St. Vith) のふたつに分かれるこの領域は、1984 年以来、ドイツ語共同体 (Deutschsprachige Gemeinschaft) と呼ばれる独自の共同体を構成している (図 1、図 2 参照)。2019 年の統計によれば、ドイツ語共同体全域の面積は 846.1 km²、人口は 77,185 人である。ベルギーの大部分はオランダ語共同体 (Flämische Gemeinschaft; 人口約 600 万人) とフランス語共同体 (Französische Gemeinschaft; 人口約 420 万人) で構成されており、ドイツ語共同体内の人口はベルギーの総人口の 0.7% 程度に留まる。しかし、このような圧倒的な少数派でありながらも、現行のベルギー憲法において、ドイツ語共同体はオランダ語共同体やフランス語共同体と同等の言語と文化に関する自治権を有することが保証されている。

過去の論考では、まず黒子 (2017) において、ベルギーの少数言語であるドイツ語を基準とした自治のモデルが成立した背景について考察した。その際に、ベルギーにおけるオランダ語系住民とフランス語系住民の積年の言語対立と、ベルギーとドイツの間の第二次世界大戦後の関係改善というふたつの要因が、ドイツ語共同体の設立に影響を及ぼしたことを指摘した。また、現在のド

図1 ドイツ語共同体の位置¹⁾図2 ドイツ語共同体の各自治体²⁾

ドイツ語共同体の言語状況の一端を、メディアと教育制度の観点から明らかにすることを試みた。続いて黒子（2018）では、ドイツ語共同体の領域が辿ってきた言語状況の変遷に注目した。とりわけ、近代における言語への基本的な態度の変化がドイツ語共同体の領域にもたらした影響について検討した。この領域はフランス革命期以前の複言語的状況からフランス、プロイセン統治下での単一言語的状況へと大きく転換した。同時に、それまで一般的な意思疎通の手段であった方言が、国家の統一性の象徴とみなされ規範的な性格を強めていった文章語によって、次第に使用領域を奪われていったことを確認した。

これらの考察を踏まえ、本稿では、ドイツ語共同体の領域のうちケルミス自治体 (*dt.* Gemeinde Kelmis / *fr.* La Calamine)³⁾ に焦点を合わせる。この自治体はドイツ語共同体の最北端に位置し、東にドイツ国境、北にオランダ国境、

1) ABEO Ostbelgien (2011: 4) より引用。なお、図中の D はドイツ (Deutschland)、NL はオランダ (Niederlande)、B はベルギー (Belgien)、L はルクセンブルク (Luxemburg)、F はフランス (Frankreich) の略称である。

2) Ministerium der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens (2019: 5) より引用。

3) ケルミスに最も近い主要都市はドイツのアーヘンである。ケルミスはアーヘンの中心部から直線距離にしておよそ 8 km 離れている。2019 年の統計によれば、ケルミスの面積は 18 km²、人口は 11,091 人で、ドイツ語共同体のなかでは比較的人口密度の高い自治体である。

西にベルギーのフランス語共同体と接している。すなわち、ドイツ語、オランダ語、フランス語という3つの言語圏が接触する地帯である。このような意味において、ケルミスはドイツ・ベルギーの国境地帯の複言語的状况を考察するうえで重要な場所であると言える。さらにケルミスは、その言語的多様性に加え、歴史的な展開も他とは一線を画している。つまり、ドイツ語共同体の他の領域とは異なり、ケルミスは1816年から1919年までの103年間、中立モレネ(Neutral-Moresnet)という独自の構成体を形成していたのである。しかも20世紀初頭には、中立モレネを計画言語(Plansprache)であるエスペラント(Esperanto)⁴⁾の国家にしようとする動きさえ見られた。なぜこのような特異な展開がこの地で生じたのであろうか。

本稿の構成は次の通りである。まず第2節では、ドイツ・ベルギー国境地帯の複言語的状况を取り上げ、現在のベルギーの地方行政区分、ドイツ語話者の分布、当地の言語状況の変化についてまとめる。第3節では、現在のケルミス自治体の領域にかつて存在した中立モレネの特徴について述べる。その際に、中立モレネの成立に大きな影響を与えた菱亜鉛鉱という鉱物の存在と、ナポレオン戦争後の国境線画定の議論についても説明する。第4節では、なぜ中立モレネでエスペラントの公用語化が目指されたのかという問いのもと、当時のヨーロッパにおけるエスペラント運動の展開とエスペラントの理念を紹介する。また、当時の新聞記事等に基づき、中立モレネにおけるエスペラント国家樹立の構想について検討する。さらに、当時中立モレネで模索されていた独立した国家としてのあり方と、この地を特徴づける言語的・文化的多様性および中立性が、エスペラント公用語化の取り組みの背景となっていたことを示す。最後に、第5節で全体の議論をまとめる。

4) 第4節で後述するように、計画言語とは、その語彙や文法体系が人工的に計画され、構築された言語のことを指す。計画言語のなかで、母語の異なる人間が意思伝達を行うための国際補助語(Welthilfssprache)として世界で最も認知されているのが、エスペラントである。これは、ポーランドの眼科医ザメンホフ(Ludwik Lejzer Zamenhof; 1859-1917)によって1887年に考案された言語で、その原義は「希望する人」である。

2. ドイツ・ベルギー国境地帯における複言語的状況とその歴史的変遷

2.1. 現在の地方行政区分—地域と共同体

はじめに、Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens (2016: 19–24) の記述に基づいて、ベルギーにおける現在の地方行政区分を確認する。ベルギー王国、通称ベルギーは、3つの地域 (Region) と3つの共同体 (Gemeinschaft) の計6つの地方行政区分から成る連邦制国家である。3つの地域とは、北部のフランドレン地域 (Flämische Region)、南部のワロン地域 (Wallonische Region) およびブリュッセル首都圏地域 (Region Brüssel-Hauptstadt) である。3つの共同体とは、オランダ語共同体、フランス語共同体、およびドイツ語共同体である。これら地域と共同体は地理的に重なり合っている。すなわち、フランドレン地域はオランダ語共同体と一致しており、オランダ語が公用語とされている⁵⁾。ワロン地域は大部分がフランス語共同体であり、そこではフランス語が公用語とされているが、東部のドイツ国境地帯にあたるドイツ語共同体の領域では、ドイツ語が公用語とされている。ブリュッセル首都圏地域では、オランダ語とフランス語の二言語が併用され、オランダ語共同体とフランス語共同体の双方に自治権が与えられている。これらの組織はそれぞれ議会と政府を持ち⁶⁾、権限分野において独自の政策を展開している。つまり、ベルギー連邦政府の権限は外交、国防、財政、社会保障、司法等に限定されており、3つの地域政府は経済、雇用、公共事業、都市開発、環境等を、3つの共同体政府は言語、文化、教育、厚生等をそれぞれ管轄している。

5) フランドレン地域のオランダ語話者は自らの言語をフラマン語 (Flämisches) と呼ぶが、本稿ではフラマン語の詳細には立ち入らない。

6) ただし、フランドレン地域とオランダ語共同体は領域が一致することから、議会と政府が事実上統合されている。

2.2. ベルギーのドイツ語母語話者の分布

前項で見たとおり、ドイツ語共同体はその領域内でドイツ語を唯一の公用語としている。しかし、この領域の住民はドイツ語のみを生活の基盤としているわけではない。例えば Ammon / Bickel / Lenz (2018: LVIII-LIX) が述べているように、ドイツ語共同体において、ドイツ語は学校教育（特に初等教育）で優先的に用いられる言語ではあるものの、共同体内の公文書はドイツ語と並んでフランス語でも作成される必要があり、中等教育では授業の一部をフランス語で行うことが必須とされている。実際に、ドイツ語共同体の住民の大半は、日常的にドイツ語と並んでフランス語を書き言葉としても話し言葉としても使用する複言語話者である。

さらに複雑なことに、ベルギー国内でドイツ語を母語とする人は、ドイツ語共同体の外部にも分布している。その領域は、A. マルメディ郡 (Kanton Malmedy)、B. モンツェン地方 (Montzener Land)、C. ボホルツ (*dt.* Bocholz / *fr.* Beho)、D. アレル地方 (Areler Land) の4地点に相当する。これらはすべてフランス語共同体に属している。

まず、図3のAで示されているマルメディ郡は、マルメディ (Malmedy) とヴァイスメス (*dt.* Weismes / *fr.* Waimes) の2自治体から成る⁷⁾。この領域には、フランス語母語話者と並んで、少数のドイツ語母語話者が居住している⁸⁾。マルメディ郡は、ドイツ語共同体を構成する北部のオイペン郡と南部のザンクト・フィート郡と同様に、フランス革命期以降、フランス (1794-1815 年)、プロイセン (1815-1919 年)、ベルギー (1919-40 年)、ドイツ (1940-45 年)、ベルギー (1945 年から現在) の各国に帰属してきた。このような共通性に基づいて、オイペン、ザンクト・フィート、マルメディの3郡は、東ベルギー地

7) 図3は GRECC (1990: Karteikarte 81) に基づいて筆者作成。

8) マルメディ郡の場合、フランス語母語話者が多数を占めているため、現在の共同体の前身である文化共同体 (Kulturgemeinschaft) が1970年初頭に発足した際に、フランス語文化共同体に含められたという経緯がある。

方 (Ostbelgien) や新ベルギー地方 (Neubelgien) と総称される⁹⁾。

マルメディ郡とは異なり、図3のBで示されているモンツェン地方、ならびにCのボホルツ、地図外のDのアレル地方は、1830年のベルギー独立の時点でベルギーに帰属した領域であるため、旧ベルギー地方 (Altbelgien) と呼ばれる¹⁰⁾。モンツェン地方には、ブライベルク (*dt.* Bleyberg / *fr.* Plombières)、バーレン (Baelen)、ウェルケンラート (Welkenraedt) の3自治体が含まれる。この領域には、伝統的にドイツ語方言を話す人々が暮らしている。その方言は、隣接するドイツ語共同体北部のケルミス、ロンツェン、オイペンと同じ南低地フランケン語 (Südniederfränkisch) のグループに分類される。同様に、グヴィ自治体 (Gouvy) の一部を成す集落であるボホルツ周辺にもドイツ語方言話者がいる。その方言は、隣接するドイツ語共同体南部のザンクト・フィートやブルク・ロイラントと同じくモーゼルフランケン語 (Moselfränkisch) の系統である。ドイツ語共同体の領域からは大きく南に離れ



図3 ドイツ語母語話者の分布領域

9) この領域はプロイセン統治時代にライン州のオイペン郡 (Kreis Eupen) とマルメディ郡 (Kreis Malmédien) を構成していたため、かつてはオイペン＝マルメディ (Eupen-Malmédien) とも呼ばれていた。

10) その地理的關係に基づいて、モンツェン地方は旧ベルギー地方北部 (Altbelgien-Nord)、ボホルツは旧ベルギー地方中部 (Altbelgien-Mitte)、アレル地方は旧ベルギー地方南部 (Altbelgien-Süd) とも称される。

た¹¹⁾、ルクセンブルクと国境を接するベルギー南東部のアレル地方は、アレル (*dt.* Arel / *fr.* Arlon) という街を中心とする領域である。この地方でも、フランス語と並んで、ルクセンブルク語と類似したモーゼルフランケン語系統のドイツ語方言が話されている。

2.3. ドイツ・ベルギー国境地帯における言語状況の変遷

過去の論考（黒子 2018）でも指摘したように、上述のドイツ語諸方言の分布は、この領域がかつて受けていた支配関係を反映している。Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens (2016: 10) によれば、現在のドイツ語共同体の領域は、1794 年以前のいわゆるアンシャン・レジームの時代に、北部と南部で異なる国の支配下に置かれていた。すなわち、北部は大部分がリンブルフ公国 (Herzogtum Limburg) に、南部は大部分がルクセンブルク公国 (Herzogtum Luxemburg)¹²⁾ に属していたのである。本項では、図 4 の年表に沿いながら¹³⁾、北部の領域を中心として、言語状況の変遷を確認する。

北部のリンブルフ公国は、1288 年のヴォリリングンの戦いを機に、ブラバント公国 (Herzogtum Brabant) の支配下に入った。Neuß (2016: 229) によれば、リンブルフ公国とブラバント公国の領内には、南部のロマンス語系住民に加えて、北西部にゲルマン語系住民が居住していた。また、ゲルマン語系住民の大

11) アレルはドイツ語共同体の首府オイペンから約 130 km 離れている。ルクセンブルクの中心部からはおよそ 24 km 北西に位置する。アレルの位置については、第 1 節の図 1 も参照のこと。

12) ルクセンブルク公国は、西部のロマンス語系住民と、東部のゲルマン語（モーゼルフランケン語）系住民から構成されていた。Neuß (2016: 230) によれば、ルクセンブルク公国は 15 世紀にヴァロワ＝ブルゴーニュ家の支配下に入り、それ以降、領内にフランス語の文章語が根付いていった。また Möller (2017: 233) も、18 世紀の南部において、ドイツ語とフランス語の文章語での公文書が競合していたと述べている。

13) 図 4 は GRECC (1990: Karteikarte 81) より引用。なお、図中の Burg. または Bu. はブルゴーニュ (Burgund)、Öst. はオーストリア (Österreich)、F. はフランス (Frankreich)、NL. はオランダ (Niederlande)、Belg. はベルギー (Belgien) の略である。

NORDEN:										
Limburg	± 1050	1288	1406	1477	1555	1713	1794	1815	1919	
Eupener Land		Limburg	Brabant	Burg.	Öst.	Spanien	Öst.	F.	Preussen	Belg.
Montzener Raum		Limburg	Brabant	Burg.	Öst.	Spanien	Öst.	F.	NL.	Belgien
SÜDEN:										
Luxemburg	1150	1270	1443							1830
Bütgenbach – St. Vith		Limburger Lehen	Luxemburg	Bu.	Öst.	Spanien	Öst.	F.	Preussen	Belg.
Fürstentum:										
Stavelot – Malmedy		Deutsches Reich						F.	NL.	Belgien
		Deutsches Reich						F.	Preussen	Belg.

図4 ドイツ・ベルギー国境地帯の支配国の推移

部分は、低地フランケン語を話していた¹⁴⁾。その後、ブラバント公国は1406年に協定によりヴァロワ＝ブルゴーニュ家（Haus Burgund）に相続されている。前項では、現在のドイツ・ベルギーの国境地帯において複言語的傾向が見られることを示したが、これは、当該地域の長い歴史的伝統に沿ったものであると考えられる。例えば Möller (2017: 233) は、北部においてリンブルフ公国がブラバント公国と長年に渡って政治的に結びついていたために、18世紀にはドイツ語、フランス語に加えて、ブラバント語と呼ばれるオランダ語の変種による文章語も定着していたことを指摘している。これら3言語の使用領域はおおよそ次のように特徴づけられる。フランス革命期以前の北部において、ドイツ語は主に学校教育および教会の言語として用いられていた¹⁵⁾。オランダ語は主に行政および司法の言語としての機能を持っていた。当時、公文書においてドイツ語が出現することはなく、次第にフランス語がオランダ語と競合するようになっていった。

北部のリンブルフ公国と南部のルクセンブルク公国による支配関係が崩れた

14) ただし、ラーレン周辺部には、リプアーリ語（Ripuarisch）と呼ばれるドイツ語方言を話すゲルマン語系住民もわずかに存在していた。現在でも、ドイツ語共同体北部の一部地域（ラーレン）と南部の一部地域（ビュトゲンバッハ、ビュリンゲン）では、リプアーリ語が話されている。

15) 例えば Wintgens (1986: 17) は、北部において教会や文化に関する文書類や書き込みには一貫してドイツ語文章語が用いられていたと述べている。

のは1794年である。両公国を含む南ネーデルラントはハプスブルク家の統治下にあったが、フランス革命政権に占領され、フランスに併合された。このとき、現在のドイツ語共同体の領域は、北部も南部もフランスのウルト県(Département de l'Ourthe)に組み込まれた。Möller (2017: 234-236)によれば、当時「ひとつの国民国家はひとつの統一言語の獲得を目指さなければならない」という考えが広がっており、そのような潮流の中で、1793-94年にはフランス全土において公文書をフランス語で作成することが求められ、それに違反した場合には処罰を受けることが条例で定められた。同時に、フランス語が共和国内で唯一の学校教育の言語に設定された。

これに伴って、現在のドイツ語共同体の領域に明確な変化が生じた。つまり、公文書作成に関して、1794年以前の複言語的状况から、単一言語的状况への変更が求められることになったのである。ただし、国民学校に関しては、表向きにはフランス語が公式の教育言語に設定されていたものの、引き続きドイツ語を用いて授業を行うことが黙認されていた。また、Wintgens (1986: 17)は、オイペンの国民学校において、1796年にドイツ語、フランス語、オランダ語、ラテン語の読み書きを教えるプログラムが計画されていたと述べている。このような指導要綱の存在は、当地においてすでに確立していた複言語的傾向を裏付けるものと考えられる。

ナポレオン戦争終結後の1815年、ウィーン会議にてラインラントのプロイセンへの帰属が決定し、現在のドイツ語共同体北部、南部はともにプロイセンの支配下に入った。同時に、現在のマルメディ郡の領域もプロイセンへと割譲された。こうして東ベルギー地方は、1920年までプロイセンのライン州(Rheinprovinz)の一部となった。プロイセンの統治下で、東ベルギー地方の公用語は再び変更された。すなわち、司法、行政、教育の言語としてドイツ語を使用することが法的に定められたのである。この政策はプロイセンによって急速に推し進められたが、マルメディのフランス語母語話者を除けば、多くの民衆にとってドイツ語の公用語化はそれほど大きな転換を意味するものではなかった。というのも、この地方で読み書きができる人々は、すでに学校や教会

でドイツ語の手ほどきを受けており、文書作成の際にも以前からドイツ語を用いていたからである (Möller 2017: 236)。

なお、先に指摘したように、現在のドイツ語共同体北部のオイペン周辺域 (オイペン地方) では伝統的にドイツ語が学校教育および教会の言語とされてきたが、司法および行政の言語としてはオランダ語が優勢であった。それゆえ、18 世紀末になるまで、ドイツ語が公文書作成に用いられることはなかったと言われている。また、オイペン地方で話されている南低地フランケン語は、オランダ語と共通する音韻的特徴を示している。したがって、少なくともオイペン地方では、言語的に類似したオランダ語の文章語が学校で教育され、日常的に標準語として使用される可能性もあったと考えられる。しかし、共同体北部の大部分がプロイセンに併合され、残りのわずかな部分 (モンツェン地方) がベルギーのフランス語圏に組み込まれたために、北部におけるオランダ語の標準語化は実現しなかった。言い換えれば、北部のプロイセン併合に伴って、それまで比較的弱い立場にあったドイツ語が、初めて司法および行政の言語としての地位を得たことになる (Neuß 2016: 229–230、Möller 2017: 233–236)。

	18 世紀	1794–1815 年 フランス統治時代	1815–1919 年 プロイセン統治時代
司法、行政の言語	オランダ語、 フランス語	フランス語	ドイツ語
学校教育の言語	ドイツ語	フランス語 (ただしドイツ語も黙認)	ドイツ語

表1 ドイツ語共同体北部の領域における文章語使用言語の変化

このように、ドイツ・ベルギー国境地帯においては、近代以前から自然発生的な複言語的傾向が認められた。しかし、フランス統治時代にフランス語が唯一の公文書の言語と定められた後、プロイセン統治時代にドイツ語が唯一の司法、行政、教育の言語としての地位を獲得し、定着した。現在、オランダ語と

フランス語を主な基盤とするベルギー国内において、ドイツ語系住民の多くがフランス語も日常的に使用する複言語話者であるにもかかわらず、共同体という枠組みのなかでドイツ語を基準とした自治のあり方が確立したことの遠因には、プロイセンの支配下におけるドイツ語の地位向上を挙げることができるように思われる。

3. 中立モレネの成立の背景とその特殊性

3.1. 菱亜鉛鉱の存在

本節では、ベルギーのドイツ語共同体の北部に位置するケルミス自治体 (Gemeide Kelmis) を紹介する。その歴史は、ドイツ語でアルテンベルク (Altenberg) と呼ばれる小さな丘の歴史と密接に結びついている。アルテンベルクは、フランス語でヴィエイユ・モンターニュ (Vieille Montagne) とも呼ばれるが、いずれの名称も「古い山」を意味し、この地に古くから存在する菱亜鉛鉱の鉱山を指し示している。菱亜鉛鉱とは、亜鉛が風化し酸化還元反応を起こすことで生じる炭酸塩鉱物で、真鍮を製造する際に必要となるため、中世の時代から大変貴重とされてきた。とりわけアルテンベルクの菱亜鉛鉱は、極めて品質がよく、ヨーロッパで最大の埋蔵量を誇っていたと言われている。ケルミスという地名は、この菱亜鉛鉱に由来する。つまり、菱亜鉛鉱の一種であるガルマイ (Galmei) を、この地方の方言で keleme ないし kelmis と呼んでいたのである¹⁶⁾。同様に、ケルミスのフランス語名であるラ・カラミン (La Calamine) も、ガルマイが原義である。

Pauquet (2018) は、ケルミスの菱亜鉛鉱の鉱床の存在がすでにカロリング朝の時代からよく知られていたと述べている。ただし記録上、この地の菱亜鉛

16) Pauquet (2018) および Schmitz (2018: 11) によれば、アーヘンの Willelmus de Roza という人物の遺産相続を調停する 1280 年 3 月 22 日付の文書に初めてケルミスの地名が kelms という形で現れる。この名称は keleme に由来し、さらにその起源はラテン語の calaminis (「ガルマイ鉱石のある場所で」の意) であると推測される。

図5 19世紀のアルテンベルク鉱山¹⁷⁾図6 現在のケルミスの鉱山跡地¹⁸⁾

鉱の採掘が確認されるのは、1344年以降である。当時、鉱山の所有者は自由帝国都市アーヘンであった。その後、鉱山の使用权をめぐり、アーヘンとリンブルフの間でたびたび論争が繰り返された。1439年には、リンブルフ公として一帯の統治権を持っていたブルゴーニュ公のフィリップ善良公 (Philipp der Gute) がアルテンベルクを差し押さえている。このときから300年以上にわたって、鉱山はリンブルフ公国の管理下に置かれた。

1794年、フランスが南ネーデルラントを併合すると、アルテンベルク鉱山はフランスの国有財産となった。フランス統治下でケルミスの集落は近隣のモレネ村 (Moresnet)¹⁹⁾ と合併し、モレネ＝ケルミス自治体 (Gemeinde Moresnet-Kelmis)、後にモレネ自治体 (Gemeinde Moresnet) という名称になった²⁰⁾。

先述のように、菱亜鉛鉱は古くから真鍮を製造するために利用されていたが、加工の過程で鉱石を高温の炉に入れると、含有している亜鉛が即座に気化

17) „La Carrière“ von Jean-Baptiste Bastiné, 1843, Museum Vieille Montagne, Kelmis.

18) 2019年8月、ケルミスにて筆者撮影。

19) Moresnet はドイツ語で「モレスネット」と発音されるが、本稿では「モレネ」の表記に統一する。

20) ケルミス自治体発行資料 Gemeinde Kelmis (Hrsg.) *Zur Geschichte von Neutral Moresnet 1816-1919*. S.6によれば、この自治体は、ウルト県のマルメディ郡 (Arrondissement Malmedy) のうち、まずヴァルホルン小郡 (Kanton Walhorn) に、後にオベル小郡 (Kanton Aubel) に属することになった。

して失われるという難点があった。それゆえ、真鉛は大量に生産することができなかった。しかし18世紀になると、新たな亜鉛製造のメソッドが開発され²¹⁾、菱亜鉛鉱から極めて純度の高い亜鉛を精製することが可能となった。リエージュ出身の化学者、ジャン＝ジャック・ダニエル・ドニー (Jean-Jacques Daniel Dony; 1759–1819) は、この方式を用いて亜鉛を大量生産することを目指論んでいた。彼はフランス国営企業として小規模な菱亜鉛鉱の採掘を行っていたアルテンベルク鉱山に着目し、1805年に皇帝ナポレオン1世から周囲8,500haの土地を発掘する認可を受けている。さらに1810年には、アルテンベルク鉱山の経営権と新式の亜鉛製造法に対する特許を獲得している (Pauquet 2018, Schmitz 2018: 12)。

亜鉛は当時、極めて便利な原料であった。それは軽く頑丈で、引き伸ばして板状にすることもでき、加圧や加熱によってどんな形状にも変えられる。しかも亜鉛は錆びないため、水と接触する場面でも使用することができる。その有用性から、19世紀に亜鉛はバケツ、ジョウロ、洗濯桶、洗面器、浴槽、雨樋など、様々な製品に加工された。パリの市街では、あらゆる屋根の覆いに亜鉛が用いられたほどであった²²⁾。しかし、このように巨万の富をもたらしうる亜鉛の大量生産に成功しながらも、ドニーの事業は軌道に乗らなかった。彼は鉱山施設に莫大な資金を投じたが、次第に亜鉛の在庫を抱えるようになり、苦境に陥っていった。1813年には、ブリュッセル出身の資産家フランソワ＝ドミ

21) 亜鉛製造の新方式とは、酸素がほぼ存在しない閉鎖された炉のなかで鉱石を熱し、亜鉛をすべて気化させるというものである。気体となった亜鉛はパイプを通して上昇し、熱源から離れた所で冷めながら液化する。それを桶に集め、凝固させることで、純度の高い亜鉛を得ることが可能となった。

22) 中世以来、屋根の覆いには陶土板が用いられていたが、近代において金属板がそれに代わるようになった。亜鉛は鉛や銅と比べて安価で、輸送しやすく、溶接でき、耐久性が高く、錆びないことから、19世紀以降、屋根の素材として急速に普及していった。パリの市街は、皇帝ナポレオン3世の時代に、セーヌ県知事ジョルジュ＝ウジェーヌ・オスマン (Georges-Eugène Haussmann) によって大規模な改造が行われたことがよく知られているが、このとき新築された建物の屋根の多くにアルテンベルクの亜鉛が用いられた。当時、「パリで雨が降ると、ケルミスに滴が落ちる」(Wenn es in Paris regnet, dann tropft es auf Kelmis.)と言われるほどであった。Museum Vieille Montagne, Kelmis 常設展示資料参照。

ニク・モッセルマン (François-Dominique Mosselman; 1754-1840) にアルテンベルク鉱山の経営権を譲渡している。その背景には、ナポレオン戦争におけるフランスの敗北がある。1813-14 年、ナポレオン 1 世がヨーロッパをもはや掌握できないことが判明すると、亜鉛市場は崩壊した。その後、ドニーは 1819 年に破産を宣言し、その後窮乏のなか亡くなっている²³⁾。

3.2. 国境線の画定と中立モレネの成立

ナポレオン 1 世失脚後の 1814-15 年、ウィーン会議においてヨーロッパの秩序再建と領土分割が検討された。フランス革命以前のネーデルラント連邦共和国と南ネーデルラントの大部分およびリエージュ司教領はネーデルラント連合王国（オランダ）として統一されることが決定した。このとき、オランダとプロイセンの間の新しい国境についても、ヨーロッパの列強の間で協議された。交渉の起点となったのはマース川であった。プロイセンはマース川をオランダとの自然国境にしたいと考えていたのに対し、オランダ王ウィレム 1 世はマース川右岸をできる限り広範囲に渡って獲得することを求めた。結果として、ウィレム 1 世のこの要求は満たされた。1815 年 4 月 5 日の布告において、プロイセンに割譲される範囲は、「旧ウルト県のうちオイペン、マルメディ、ザンクト・フィート、クローネンブルク、シュライデンの 5 つの小郡と、リエージュ街道²⁴⁾からアーヘンに至るまでのオベル小郡の一部」に限定されたのである²⁵⁾。つまり、国境線はアーヘンとリエージュの間に引かれることになった。

1815 年 6 月 9 日に調印されたウィーン議定書は 121 条から成るが、そのうち第 25 条ではプロイセン、第 66 条ではオランダの国境が次のように定められて

23) Gemeinde Kelmis (Hrsg.) *Zur Geschichte von Neutral Moresnet 1816-1919*. S.6 参照。

24) リエージュ街道 (Lütticher Straße) とは、アーヘンとリエージュを結ぶ街道で、郵便馬車が 1 日のうちにアーヘン・リエージュ間を往復できるようにするために 1750 年に建設されたものである。アルテンベルク鉱山は、この街道沿いに存在していた。

25) Gemeinde Kelmis (Hrsg.) *Zur Geschichte von Neutral Moresnet 1816-1919*. S.7 参照。

いる²⁶⁾。

第 25 条：旧ウルト県において、ザンクト・フィート、マルメディ、クロネンブルク、シュライデン、オイペンの 5 つの小郡と、オベル小郡のうちプロイセンのアーヘンの南方に突き出た先端部は、プロイセンに帰属する。国境線はこれら小郡の境界線に沿って延び、南から北へ延びる線が前述のオベルの先端に切り込み、旧ウルト、ムーズ＝アンフェリウール、ルールの 3 県が接する点に結びつく。

第 66 条：オランダの国境線は、リンブルフ公国の旧オイペン小郡の境界と接する地点まで、旧ウルト県とルール県の境界線に沿って延びる。さらに旧オベル小郡の一部分を右側にして、国境線は旧オイペン小郡西側の北方へ延びる境界に沿い、旧ウルト、ムーズ＝アンフェリウール、ルールの 3 県が接する点に結びつく。

ここで論争の対象となったのは、フランス帝政期のウルト (Ourthe)、ムーズ＝アンフェルウール (Meuse inférieure)、ルール (Roer) の 3 県の接点に結びつく両国の国境線のあり方である。図 7 のように²⁷⁾、その接点は、ファール

26) 条文の日本語訳は筆者による。原文は次の通り。[第 25 条] Dans l'ancien département de l'Ourthe les cinq cantons de St. Vith, Malmedy, Cronenburg, Schleiden et Eupen avec la pointe avancée du canton d'Aubel au midi d'Aix-la-Chapelle appartiendront à la Prusse, et la frontière suivra celle de ces cantons, de manière qu'une ligne, tirée du midi au nord, coupera la dite pointe du canton d'Aubel et se prolongera jusqu'au point de contact des trois anciens départements de l'Ourthe, de la Meuse inférieure et de la Roer. / [第 66 条] Elle (la frontière) longe ensuite ces limites (entre les anciens départements de l'Ourthe et de la Roer) jusqu'à ce qu'elles touchent à celles du canton ci-devant français d'Eupen dans le duché de Limburg et en suivant la limite occidentale de ce canton dans la direction du nord, laissant à droite une petite partie du ci-devant canton français d'Aubel se joint au point de contact des trois anciens départements de l'Ourthe, de la Meuse inférieure et de la Roer.

27) 図 7 は https://de.wikipedia.org/wiki/Französische_Départements_in_Mitteleuropa_von_1792_bis_1814 に基づき、筆者作成。

ス山 (Vaalserberg) という小さな山の頂上に位置する。オランダは、第 25 条に基づき、国境線を 3 県の接点に向かってまっすぐに延びる南北の軸と解釈した。これに対してプロイセンは、国境線を 3 県の接点から南西方向に延びる線と解釈した。プロイセンは次のような根拠をもってオランダの主張を却下している。すなわち、「国境線は北から南に向かって延びる必要があるに

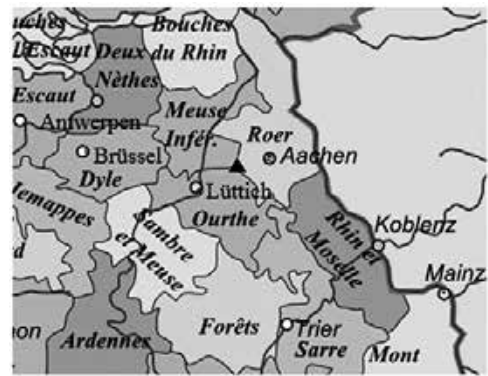


図 7 フランス帝政期における県の分布
(▲は該当する 3 県の接点)

もかわらず、条文では南から北へ方向が示されている。しかもオベル郡の先端部はアーヘンの南ではなく南西に位置するため、北へ延びる線というのは数学的に意味をなさない」²⁸⁾ というものである。このように双方の意見が対立したのは、両国ともファールス山の南に位置するアルテンベルク鉱山を手中に収める必要があったからである²⁹⁾。

ウィーン議定書の調印から 1 年が経過した 1816 年 6 月 26 日、オランダとプロイセンの間でアーヘン国境協定 (Aachener Grenzvertrag) が結ばれた。これは、ナイメーヘン近郊からシェンゲンに至るまで、両国間の全国境を厳密に規定するものである。ただし、モレネ周辺域の国境に関しては、結局両国の間で意見の一致を見なかった。そのため、図 8 のように³⁰⁾、モレネ自治体にはファールス山の頂点から延びる 2 本の国境線が暫定的に引かれた。その中間にアルテンベルク鉱山は位置していた。また南側の境界は、リエージュとアーヘ

28) Gemeinde Kelmis (Hrsg.) *Zur Geschichte von Neutral Moresnet 1816-1919*. S.7 参照。

29) オランダは、国王ウィレム 1 世が振興する商工業のために、亜鉛や真鍮の原料となる菱亜鉛鉱を確保したいと考えていた。一方のプロイセンは、シュレージエンのカトヴィッツ (現カトヴィツェ) に菱亜鉛鉱の鉱山をすでに所有しており、競合関係を避けるために、アルテンベルクの操業を停止させようとしていたと言われている。Museum Vieille Montagne, Kelmis 常設展示資料参照。

30) 図 8 は Reybrouck (2017: 23) より引用。なお、この図では、1830 年にベルギーがオランダから独立した後のプロイセン、オランダ、ベルギー、中立モレネ 4 国の境界線が示されている。

ンを結ぶリエージュ街道に沿うものとされた。オランダとプロイセンは、最終的な国境を後に定めることで合意した。それまで両国は問題の三角地帯を共同で管理し、双方とも軍隊をこの区域に進駐させないこととした。

以上のように、アーヘン国境協定の締結によって一区画の奇妙な中立地帯が作り出された。この領域は、プロイセンとオランダの両国に帰属しながら、同時にいずれにも帰属しないものとされた。ヨーロッパにおいて他に例を見ないこの区画は、「モレネの論争中の領域」(das strittige Gebiet von Moresnet)あるいは「中立モレネ」(Neutral-Moresnet)と呼ばれ、以後、国家に類似した構成体として、1919年までの103年間存続した。

なお、アーヘン国境協定によって、フランス統治時代のモレネ自治体が3つの区域に分割されたことにも注意しておきたい。3つの区域とはすなわち、中立モレネ (Neutral-Moresnet)、プロイセン領モレネ (Preußisch-Moresnet)、元来のモレネ村 (Moresnet) である (図8参照)。プロイセン領モレネは中立モレネの東側とリエージュ街道の南側に位置し、その名の通りプロイセン帰属した。モレネ村は中立モレネの西側に位置し、1816年から1830年まではオランダ、1830年以降はベルギーに帰属した。ベルギーの統治下で、モレネ村はベルギー領モレネ (Belgisch-Moresnet) とも呼ばれた。

3.3. 中立地帯の特殊性

中立モレネの面積はわずかに 3.44 km^2 であった。現在ヨーロッパで極小国



図8 中立モレネ 1816-1919年
(★はアルテンベルク鉱山)

家と呼ばれる国でも、サンマリノ (61 km²)、リヒテンシュタイン (160 km²)、アンドラ (468 km²) のように、ずっと大きな広がりを持っている。もちろんモナコ (2.02 km²) やヴァチカン市国 (0.44 km²) といった、中立モレネよりも小さな国も存在するが、これらは人口が密集した都市部に位置している。これに対して、中立モレネの領域は大半が森林地帯であり、1816 年当時には 50 戸ほどの家屋しかなく、住民数も 256 人に過ぎなかった³¹⁾ (Pauquet 2018)。

中立モレネでは、他のヨーロッパ諸国とは異なる奇妙な状況が数多く観察された³²⁾。例として Reybrouck (2017: 27-29) の記述を紹介する。

選挙は一度も行われなかった。税金は極めて低く、詳細は確認できないが、所有する地所や扉、窓、株、女中の数によってその額が算出された。独自の通貨は存在せず、フランス・フランが公式とされたが、ターラー、マルク、グロッシェン、ベルギー・フランも使用可能であった。公用語はなく、言語はドイツ語、フランス語、低地ドイツ語とリンブルフ語の中間のケルミス方言が入り混じっていた。関税は隣国のみが支払っていた。就学義務も、兵役義務も存在しなかった。(中略) しかし、この国には少なくとも青・白・黒の国旗と、勘定には使うことのできない記念硬貨があった。1854 年以降は、ひとりの警官がいた。そして、極めて短い期間であるが、独自の切手があった。それは 1886 年のことで、地元のある切手収集家の着想であったが、2 週間後には切手の発行が禁止された。郵便はプロイセンとベルギーの郵便配達員によって配送された。このふたりが業務

31) 彼らは中立モレネの市民とみなされ、パスポートのような書面も発行されていた。Deutschlandfunk: „Amikejo, Ort der Freundschaft“ – Wie mit Esperanto Staat gemacht werden sollte. [Radiosendung, 12.05.2008] (https://www.deutschlandfunkkultur.de/amikejo-ort-der-freundschaft.3720.de.html?dram:article_id=190076) 参照。

32) その特異性ゆえ、中立モレネは Provisorium (暫定的解決策)、Kuriosum (奇妙な国)、Unikum (唯一無二の国)、Niemandland (ふたつの国境線に挟まれた中立地帯)、Possenstaat (悪ふざけのような国家)、Treppenwitz der Geschichte (歴史の悪い冗談) などと形容されることもあった。Museum Vieille Montagne, Kelmis 常設展示資料参照。

の後に落ち合って一杯飲もうとする場合には、時間に注意しなければならなかった。というのも、中立モレネとプロイセン領モレネの間には1時間の時差があったからである。中立地帯はパリの標準時ゾーンに位置しており、街道を渡った先はベルリンの標準時に従っていた。さらに厄介なことに、オランダの時刻はベルギーの時刻より20分進んでいた。国際鉄道路線が建設される以前、時刻はまだローカルな案件であったのだ。[翻訳は筆者による]

以下では、中立モレネの更なる特殊性を、統治構造、兵役、鉱山経営の3点からまとめる。

3.3.1. 中立モレネの統治構造

先述の通り、モレネの論争中の領域はアーヘン国境協定において「プロイセンとオランダによって共同で管理され、双方の軍隊はそれを占領してはならない」(第17条)と規定されている。それゆえ、中立モレネはしばしば共同管理区域(Kondominium)と呼ばれる。ただし、共同管理区域では本来、それぞれの国家が同時性と同等性に基づいて互いの権利を承認していなければならない。ところが、中立モレネは双方が完全な所有権を主張する係争地であったため、厳密な意味での共同管理区域とは異なっていた(Malvoz 1983: 4-5)。

プロイセンとオランダは、1人ずつ王国弁務官(königliche Kommissare)を当地に派遣していた。彼らはフランス帝政期の地方長官(Präfekt)と同等の権限を持ち、共同の申し合わせに従いながら、中立モレネの統治を行っていた。また、実務は王国弁務官によって任命された市長(Bürgermeister)が担当していた³³⁾。1830年にベルギー独立革命によってベルギーがオランダから独立する

33) 中立モレネの初代市長は、アルノー・ド・ラソー(Arnauld de Lasaulx; 1774-1863)である。ラソーは1802年から1816年までフランス統治下のモレネ自治体の市長(Maire)の座に就いており、それに引き続いて、1817年から1859年までの長期に渡り、中立モレネの市長を務めた。同時に彼はプロイセン領モレネとヘルゲンラート自治体(Hergenrath)の市長も務めていた。

と、中立モレネに隣接する西側地域はベルギー領となり、中立モレネにおけるオランダの役割も実質的にベルギーに引き継がれた。1854年には市議会（Gemeinderat）が設立され、王国弁務官によって10人の議員が任命された。プロイセンとオランダ（1830年以降はベルギー）の統治権は、上述の通り共同管理と軍事的占領の禁止によって制限されており、実際のところ、王国弁務官や市議会から提出された調停策を承認する程度であったと言われている。とりわけ19世紀後半以降、その傾向が顕著であった（Pirlot 1990: 7）。なお、中立モレネは暫定的に生じた区画であり、100年以上も存続するとは想定されていなかったため、独自の法律が存在しなかった。この領域ではフランス帝政期のナポレオン法典（Code Napoléon）、つまり1804年の民法典（Code Civil）と1810年の刑法典（Code Pénal）が継続して有効性を持つと1816年に取り決められていた。しかし、これらの法律はすぐに時代に適応しなくなっていた³⁴⁾。

3.3.2. 兵役の免除

プロイセンとオランダ（1830年以降はベルギー）の王国弁務官たちは、兵役の導入を長年検討していた。しかし、中立モレネには当初共同の統治機関が存在せず、また王国弁務官の間でも兵役期間に関する意見の一致が見られなかったため、1847年まで中立モレネの住民は、その国籍にかかわらず、全員が兵役を免れていた。このことがきっかけとなり、多くの若者がプロイセン、オランダ、ベルギーから中立モレネに移り住んだ。なお、ベルギーは1847年に国外に居住するベルギー人に対しても兵役を課すことを決めた。プロイセンとオランダもその決定に追随している。以後、この領域で兵役を免除されたのは、中立モレネの市民と、移住によって国籍を喪失したプロイセン人の子孫に

34) Museum Vieille Montagne, Kelmis 常設展示資料参照。なお、中立モレネに裁判所は存在しなかったため、刑事事件や民事訴訟はプロイセンまたはベルギーの法廷でナポレオン法典に基づいて審理された。

限定された³⁵⁾。

3.3.3. アルテンベルク鉱山の経営

モッセルマンに経営権が譲渡されたアルテンベルク鉱山は、1837年にヴィエイユ・モンターニュ亜鉛採掘鑄造株式会社 (Société des Mines und Fonderies de Zinc de la Vieille Montagne; 略称 VM)³⁶⁾ となり、亜鉛の需要がヨーロッパ全体で高まりつつあった19世紀半ばに絶頂期を迎えた (Pauquet 2018)。採掘には水車や蒸気機関も用いられ、坑道の深さは地下 65 m に達した。アルテンベルク周辺には、鉱山の管理棟、鉱石搬出用の線路、鉱石洗浄用の水槽、亜鉛鑄造工場も付設された。このような鉱山施設の充実と技術的な進化によって、VM は 1850 年には 29,993t のガルマイを産出し、1869 年には 2,467t の亜鉛の延べ棒を生産している。労働者の数は増加の一途をたどり、1858 年には企業全体で約 1,400 人の従業員がいたと言われている (Schmitz 2018: 14)。これに伴って、中立モレネの人口は 40 年間で 10 倍に膨れ上がった。1857 年の家屋数は 304 戸、人口は 2,572 人を数えた。さらに 1880 年には 4,000 人にまで達している (Pauquet 2018)。このように、アルテンベルク鉱山は中立モレネに空前の経済ブームをもたらした。

鉱石の採掘と亜鉛の鑄造は骨の折れる労働であったが、それでも多くの人々が近隣諸国から仕事を求めてケルミスにやって来たのは³⁷⁾、VM の賃金と福利厚生が充実していたためだと言われている。例えば、年金共済金庫、貯蓄組合、病気や怪我を負った労働者のための緊急援助基金が用意されていた。また、リエージュ近郊のコワント (Cointe) には、年老いた労働者や孤児のための保護施設も作られた。さらに、VM は中立モレネの学校、教会、労働者用住宅の建

35) Gemeinde Kelmis (Hrsg.) *Zur Geschichte von Neutral Moresnet 1816-1919*. S.12 参照。

36) この会社は、リエージュ近郊のアングラー (Angleur) を本拠地とし、先述のフランソワ＝ドミニク・モッセルマンとその子供たちがベルギー銀行 (Banque de Belgique) とともに設立したものである。

37) 中立モレネに移住した者は多くがプロイセン人とオランダ人であったが、フランス人、ベルギー人、その他ヨーロッパの国々の出身者もいた。

設資金を出し、教師、聖職者、医師に報酬を支払っている³⁸⁾。言い換えれば、VM は中立モレネにおいて本来であれば行政が担うべき役割も果たしていたのである。

4. 中立モレネにおけるエスペラント公用語化の試み

4.1. エスペラント運動の展開

本節では、20 世紀初頭に中立モレネで生じたエスペラント国家樹立の試みを取り上げる。この企てを主導したのは、ヴェッツラー (Wetzlar) 出身でプロイセン領モレネに住み VM の主任医師を務めていたヴィルヘルム・モリー博士³⁹⁾ (Dr. Wilhelm Molly; 1838–1919) と、ピレネー山脈に近いフランスのサン・ジロン (St. Girons) 出身でアーヘンに長年居住していたギュスターヴ・ロイ教授⁴⁰⁾ (Prof. Gustave Roy; 1859–1943) であった。モリー博士の孫にあたるヴィルヘルム・デイトマーの回想 (Dithmar 2018) によると、ふたりは趣味としていた郵便切手の交換か、フリーメイソンのロッジを通じて、1906 年頃に知り合ったとされる。当時、ヨーロッパではエスペラント運動 (Esperanto-Bewegung) と呼ばれるエスペラントの普及計画が急速に進行し、フランス (1898 年)、スイス (1903 年)、ドイツ (1906 年) など、各地でエスペラント協会が設立された。またこの頃、世界エスペラント大会 (Esperanto-Weltkongress) というエスペ란ティスト⁴¹⁾の交流の祭典が各地で開催されるように

38) Museum Vieille Montagne, Kelmis 常設展示資料参照。

39) ナポレオン時代の法律では、鉱山労働者はその他の労働者よりも手厚い医療を受けなければならないと定められていた。そのような理由から、モリー博士は VM に医師として雇用されていた。Belgischer Rundfunk (BRF) : Neutral-Moresnet – ein Kuriosum europäischer Geschichte. [Radiosendung, 15.01.2016] (<https://brf.be/regional/954037/>) 参照。

40) Deutschlandfunk: „Amikejo, Ort der Freundschaft“ – Wie mit Esperanto Staat gemacht werden sollte. [Radiosendung, 12.05.2008] (https://www.deutschlandfunkkultur.de/amikejo-ort-der-freundschaft.3720.de.html?dram:article_id=190076) 参照。

41) エスペ란ティスト (Esperantist) とは、エスペラントの話者を指す。



図9 第2回世界エスペラント大会のポスター



図10 第2回世界エスペラント大会の集合写真
(1906年、スイス、ジュネーヴ)

なった。第1回世界エスペラント大会が1905年にフランス、ブローニュ＝シュール＝メールで開催されると、第2回（1906年、スイス、ジュネーヴ）⁴²⁾、第3回（1907年、イギリス、ケンブリッジ）と続いた。ロイ教授は、このエスペラント運動の創始者のひとりであった。

4.2. 国際補助語としてのエスペラントの理念

ここでエスペラントの理念と言語的特徴に触れておく。エスペラントは、1887年にポーランドの眼科医ザメンホフ（Ludwik Lejzer Zamenhof; 1859–1917）によって考案された計画言語（Plansprache）である。計画言語とは、その語彙体系や文法体系が人工的に計画され、構築された言語を指す。計画言語に対置される概念は自然言語（natürliche Sprache）であり、これは人間のコミュニケーション手段として通時的な発展を遂げてきた言語を指す。エスペラントは、計画言語のなかで、母語の異なる人間が意思伝達を行うために用いられる国際補助語（Welthilfssprache）として世界で最も認知されている。

42) 図9および10はオーストリア国立図書館計画言語資料館ウェブサイト (<https://www.onb.ac.at/bibliothek/sammlungen/plansprachen>) より引用。

国際補助語は、ある民族が話す自然言語、すなわち民族語を廃絶して、それに取り替わるということを目指すものではなく、むしろ、民族語の地位には全く影響を与えず、それが強大な言語によって影が薄くなることのないように守りながら、諸民族間の媒介を行うことに本来の機能があるとされている（田中2007: 34-35）。このような理念のもと、ザメンホフは i) 世界中のあらゆる人が簡単に学ぶことができる言語、ii) 誰もが母語と並ぶ第二言語として用いることができる国際補助語、iii) 例外のない文法規則からなる言語、iv) 英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、ラテン語、ギリシア語など、多くのヨーロッパ言語で使われている語彙を基礎とする言語を構築しようとした。本稿ではエスペラントの言語的特徴に詳しく立ち入ることはできないが、上記の「例外のない文法規則」という点に関連して、エスペラントの用例をいくつか示しておきたい⁴³⁾。

(1)	a. skrib-o	<i>Schrift</i>	(名詞)
	b. skrib-a	<i>schriftlich</i>	(形容詞)
	c. skrib-e	<i>in schriftlicher Form</i>	(副詞)
	d. skrib-i	<i>schreiben</i>	(動詞不定詞)
(2)	a. progress-o	<i>Fortschritt</i>	
	b. mal-progress-o	<i>Rückschritt</i>	
(3)	a. san-a	<i>gesund</i>	
	b. mal-san-a	<i>krank</i>	
(4)	a. poem-o	<i>Gedicht</i>	
	b. poem-ar-o	<i>Gedichtsammlung</i>	
(5)	a. koleg-o	<i>Kollege</i>	
	b. koleg-ar-o	<i>Kollegenschaft</i>	

43) (1)–(5) の例は Österreichische Nationalbibliothek, Esperantomuseum, Wien 常設展示資料から引用。

(1) のように、エスペラントでは接尾辞によって品詞が区別される。すなわち、-o は名詞、-a は形容詞、-e は副詞、-i は動詞の不定詞を示す。また、(2) と (3) のように mal- という接頭辞を付加することで反対概念を表す語を規則的に派生することができる。さらに (4) と (5) のように -ar という接尾辞を付加することで集合概念を表す語を派生することができる。以上のように、エスペラントは文法規則が極めて整理された人工的な言語であると言える。

4.3. エスペラント国家樹立の構想

Dithmar (2018) の記述によれば、モリー博士は複数の古典語や現代語に精通しており、普段から世界中の人々と手紙を通じて交流していたため、ロイ教授との会合によって、国際補助語としてのエスペラントの理念に共感したと考えられる。その後、モリー博士はすぐにエスペラントを習得し、ふたりは「友情の地」を意味するアミケーヨ (Amikejo) という名のもと、中立モレネに世界初のエスペラント国家を樹立することを構想した。モリー博士は中立モレネにおいて VM の主任医師として名が通っていただけでなく、1881 年以降、プロイセン領モレネの助役も務めていた。当時、プロイセン領モレネの市長は中立モレネの市長を兼任していたため⁴⁴⁾、モリー博士が中立モレネの政治に与える影響は小さくなかったものと推測される。1906 年以降、中立モレネではエスペラントに関する大小規模のさまざまな集会が開かれ、次第に支持者が増えていった⁴⁵⁾。このエスペラント公用語化の試みは、ヨーロッパ各国の新聞で盛んに取り上げられた⁴⁶⁾。1908 年 1 月 1 日から 3 月 31 日の 3 ヶ月間には、150 以

44) 当時の市長はフーベルト・シュメッツ (Hubert Schmetz) という人物であった。彼は 1885 年から 1915 年まで中立モレネの市長を務め、同時にプロイセン領モレネの市長を兼任していた。プロイセン領モレネの助役を務めていたモリー博士は、いわばシュメッツの片腕であった。

45) 1908 年、ロイ教授は自身の構想を国外にも周知するため、フランス語 (*Projet réalisable en six mois d'un état espérantiste indépendant: Moresnet-Neutre*) とエスペラント (*Kiel Neŭtra-Moresneto fariĝis Amikejo*) でそれぞれ冊子を作成し、出版している。

46) ヨーロッパの新聞のみならず、アメリカ合衆国のニューヨークタイムズでも、1908

上の新聞がこのプロジェクトを報じたと言われている。

ここで、ロイ教授のインタビューが掲載されている 1908 年の 2 月の新聞記事⁴⁷⁾を紹介しておきたい (図 11 参照)。ここでロイ教授は自身の構想について詳しく語っている。彼は、リスボン、マドリッド、パリ、ベルリン、サンクト・ペテルブルクを繋ぐ鉄道路線⁴⁸⁾とコンスタンティノーブル、ウィーン、ブリュッセル、ロンドンを繋ぐ鉄道路線⁴⁹⁾の交点がベルギーのナミュール (Namur)⁵⁰⁾にあることを指摘し、今後ますます多くの旅行者がこの街を通ることになると述べている。さらに、この地域がベルギー、オランダ、ドイツ、フランスに接する「諸民族の十字路」(Kreuzweg der Völker)であり、人々が絶え間なく往来する場所であることから、彼らが途中下車して滞在することのできる「世界交通の中心地」(Weltverkehrszentrum)を作るつもりであるという。ただし、ベルギーの領内にこのような目的の施設を建設するのは、他国の反感を買う可能性があるため、適当ではないとしている。そこで、ナミュールからさほど遠くない中立地帯に着目し、異なる母語を話す者同士の相互理解をはかり、住民が旅行者と交流できるよう、中立モレネの公用語をエスペラントにするという考えに至ったのだという。

ロイ教授は、同記事のなかで、エスペラントの考案者であるザメンホフからもすでに計画への支持を得ており、1908 年 8 月の第 4 回世界エスペラント大会 (ドイツ、ドレスデン) において正式な提案を行うと述べている。その後、

年 2 月 23 日にロイ教授の計画が報道されている。原文は Becker (2010: 66) を参照のこと。

47) Neues Wiener Journal. 12. Februar 1908. S.6. Wien. (http://anno.onb.ac.at/pdfs/ONB_nwj_19080212.pdf) より引用。なお、記事の検索にはオーストリア国立図書館の ANNO-Suche (<http://anno.onb.ac.at/anno-suche/>) を用いた。

48) 当時、国際寝台車会社の北急行 (1896 年運行開始) と南急行 (1887 年運行開始) を利用して、パリ経由でリスボンとサンクト・ペテルブルク間を移動することが可能となっていた。

49) 1900 年には、ベルギーのオーステンデとオスマン帝国のコンスタンティノーブルを直通で繋ぐオーステンデ・ウィーン・オリエント急行が開通している。オーステンデはイギリスのドーバーと船で接続していた。

50) ナミュールはベルギー南部の都市で、現在ではワロン地域の首府となっている。ケルミスからは直線距離で 85 km ほどの場所にある。第 1 節の図 1 も参照のこと。

Ein Esperantistenstaat.

(Ein fühner Plan. — Der Kreuzweg der Völker Europas. — Esperanto Landesprache. — Ein Weltverkehrszentrum. — Der nächste Esperantistenkongress. — Neutral-Moresnet.)

Der französische Universitätsprofessor Gustave Roy ist auf den Gedanken gekommen, in Neutral-Moresnet einen unabhängigen Staat zu gründen und das Esperanto zur Landesprache zu machen. Ein Mitarbeiter des „Petit Parisien“, Herr D. Roncler, berichtet nun in launiger Weise über ein Gespräch, das er dieser Tage mit dem unternehmungslustigen Gelehrten gehabt hat.

„Qu al profesoro Gustavo Roy mi havas la honoron paroli?“ (Habe ich die Ehre, mit dem Professor Gustav Roy zu sprechen?) fragte der Zeitungsmann im reinsten Esperanto. — „Al li mem, sinjoro“, (Mit ihm selbst, mein Herr), antwortete der Professor. — „Sie wollen also innerhalb eines Zeitraumes von sechs Monaten einen unabhängigen Esperantistenstaat gründen, Herr Professor? Sie wissen doch wohl, daß der König der Belgier etwas mehr Zeit gebraucht hat, um in Afrika seinen unabhängigen Kongostaat zu gestalten?“ — „O, das ist durchaus nicht dasselbe. Mein Plan läßt sich in sechs Monaten gut verwirklichen. Wir sind jetzt im Februar, im August kann also der Esperantistenstaat fertig sein.“ — „Und könnten Sie mir vielleicht sagen, wie Sie Ihre Pläne verwirklichen wollen?“ — „Sehr gern. Sehen Sie sich gefälligst diese Karte hier an.“ Herr Roy öffnete einen Atlas und begann seine Demonstrationen. „Können Sie mir“, so fragte er im Tone eines Schulmeisters, „auf der Karte von Europa die beiden markantesten Schienenwege zeigen?“ — „Ich sehe da zuerst die Linie Lissabon, Madrid, Paris, Berlin, Petersburg; dann die Linie Konstantinopel, Wien, Brüssel, London; diese beiden „großen Schienenwege schneiden sich in Ramur.“ — „Werten Sie sich also,“ bozierte Herr Roy weiter, „daß die Linien, welche alle großen Staaten Europas und durch Europa alle andern Teile der Welt miteinander verbinden, sich in der Gegend von Ramur kreuzen. Durch Ramur kommen also mehr Menschen aus verschiedenen Ländern und mit verschiedenen Sprachen als durch irgendeine andere Stadt.“ — „Hier grenzen ja auch Belgien, Holland, Deutschland und Frankreich aneinander.“ — „Na, sehen Sie, und das ist ein neuer Beweis dafür, daß diese Gegend der Kreuzweg der Völker ist und daß hier während Vertreter aller Nationen durchkommen, und zwar in größerer Zahl als irgendwo anders.“ — „Das ist schon richtig, aber sie bleiben doch nicht dort!“ — „Das habe ich mir auch gesagt, und ich dachte: wenn sie dort blieben, wäre es wie beim Turmbau von Babel, denn man würde dort alle Sprachen sprechen und sich natürlich nicht verstehen. Daraus folgerie ich aber, daß man, wenn man

sich nicht versteht, unter allen Umständen eine Verständigung herbeizuführen suchen müßte. Esperanto kann man nun in dreißig Stunden erlernen. Aus dem Sprachchaos würde sich also allmählich das Esperanto lösen. Die Verwirklichung dieses Gedankens wäre aber von einer Bedingung abhängig: die Reisenden aller Länder müßten in der Gegend von Ramur Station machen.“ — „Und hat Ihnen der Gott des Esperanto einen Ausweg gezeigt?“ — „Ja. Ich sagte mir, daß man in dieser bevorzugten Gegend zur Förderung des Weltfriedens ein Weltverkehrszentrum schaffen müßte. — Wenn man nun für diesen Zweck ein belgisches Territorium wählte, würde man die Eifersucht der anderen Nationen erregen; dasselbe würde der Fall sein, wenn man ein holländisches oder deutsches Territorium aussuchte. Ich kam infolgedessen zu dem Schluß, daß man eine neutrale Gegend wählen müßte. Und dieses neutrale Gebiet existiert: es ist Neutral-Moresnet, ein reicher Ort mit 3700 Einwohnern: das ist unser Esperantistenstaat, das ist Amitejo!“ — „Wollen Sie denn Moresnet kaufen?“ — „Fällt mir gar nicht ein. Ein Esperantistenstaat ist einfach ein Staat, in welchem man Esperanto spricht. Die Fremden werden Esperanto sprechen, um der Sprachverwirrung ein Ende zu machen, und die Eingeborenen werden es lernen, um zu den Reisenden Beziehungen anknüpfen zu können.“ — „Und Sie glauben wirklich, daß Ihr Projekt im August verwirklicht sein wird?“ — „Ja! Im August findet in Dresden ein internationaler Esperantistenkongress statt. Wenn nach diesem Kongress Belgier, Holländer, Franzosen, Engländer, Spanier, Portugiesen, Amerikaner, Italiener, Österreicher, Russen, Japaner — Japan hat eine der bedeutendsten esperantistischen Gruppen — sich zur Rückkehr in die Heimat rüsten werden, werden sie sicher nicht dem Verlangen widerstehen können, eine Institution, die sie lebhaft interessieren muß, zu besichtigen. Wir rechnen auch stark auf die Mitarbeit der Handlungsreisenden, die unser Werk mächtig fördern können. Ich habe bereits zahlreiche Zustimmungserklärungen aus allen Ländern; man sieht ein, daß Neutral-Moresnet der Sitz der ständigen Friedenskonferenz sein müßte, und Dr. Zamenhof, der Erfinder des Esperanto, hat mit vielen anderen hervorragenden Persönlichkeiten meinen Plan gleichfalls gebilligt. Warum sollte man nicht auf diese Weise zur allgemeinen Verbrüderung gelangen?“

Mit diesem hoffnungsvollen Ausblick in die Zukunft schloß die Unterhaltung. „Nu, je prevedo, sinjoro Redaktoro“ (Auf Wiedersehen, Herr Redakteur), sagte der Professor. — „Je prevedo, sinjoro profesoro“, antwortete Roncler.

図 11 Neues Wiener Journal の記事 (1908 年 2 月 12 日)

彼の期待通り、8月18日に同大会で彼の提案は承認され、同時に中立モレネが世界のエスペラント運動の本拠地となることが決定した⁵¹⁾。

4.4. なぜ中立モレネでエスペラント公用語化が目指されたのか

前項で確認したとおり、ロイ教授の構想には、世界平和の促進という理想が根本にあるとはいえ、ヨーロッパの主要鉄道路線の交点という地の利を生かし

51) Gemeinde Kelmis (Hrsg.) *Zur Geschichte von Neutral Moresnet 1816-1919*. S.13 参照。なお、Dithmar (2018) によれば、同大会ではエスペラント運動の本拠地としてオランダのデン・ハーグも候補に挙がっていたが、ドイツ、オランダ、ベルギーの接点としての立地が評価され、中立モレネが選ばれたのだという。



図 12 1908 年の中立モレネのエスペラント団体⁵²⁾

た商業的な意図も多分に透けて見えるように思われる。それでは、なぜそのような計画が中立モレネの地で実行されようとしていたのであろうか。この点を明らかにするために、以下では 19 世紀後半以降に中立モレネが置かれていた社会的状況について述べる。

4.4.1. 独立した国家としてのあり方の模索

3.3.3 で見たように、アルテンベルク鉱山は VM のもとで 1850 年代に隆盛を誇り、中立モレネに大きな経済的繁栄をもたらした。しかし、菱亜鉛鉱の枯渇によって、その後次第に衰滅へと向かっていった。Schmitz (2018: 14-15) によれば、1858 年にはアルテンベルク鉱山の地上での露天採掘作業が終了し、1884 年には地下での坑内採掘作業も終了している。これに伴って、亜鉛鑄造工場も 1885 年に閉鎖された。VM はケルミスの周辺部（ベルギーのウェルケンラートやプロイセンのロンツェンなど）でも採掘の認可を受けていたため、

52) Esperantista Grupo de Amikejo (Neutra-Moresneto). Museum Vieille Montagne, Kelmis.

アルテンベルクの廃鉱後は、外部に事業を拡大していった。このように中立モレネの先行きが不透明となるなかで、19世紀末から20世紀初頭にかけて、この領域をより独立した国家として確立しようとする動きが生じた。そのうちのひとつが、3.3でも言及した独自の郵便切手の発行である。

Bertha (2018) によれば、中立モレネには郵便局がなく、郵便業務はベルギーとプロイセン（1871年以降はドイツ帝国）によって担われていた。そのため、中立モレネでは両国の郵便切手が有効であり、郵便の宛先がベルギーであればベルギーの切手を貼り、宛先がドイツであればドイツの切手を貼ることになっていた。そのような状況下において、1886年に先述のモリー博士が、当時の市長に対して、中立モレネに郵便機関を作り独自の切手を発行することを提案している⁵³⁾。これを受けて、市長はベルギーの王国弁務官に郵便機関の設立を報告した。しかしベルギーの王国弁務官は、1799年12月12日付のフランスの法律に「郵便業務は国家独占事業である」と規定されていることを理由として、プロイセンの王国弁務官と共同で当該切手の使用を禁ずる法令を即座に交付している。中立モレネ独自の切手が流通していた正確な期間については不明であるが、14日間とも17日間とも18日間とも言われている (Bertha 2018, Dithmar 2018)。

独自の郵便切手発行が失敗に終わった後、中立モレネでは別の新たな試みが行われている。カジノの設立である。1902年、ベルギーではあらゆる形態の賭博が禁止され、温泉地としても名高い街であるスパ (Spa) のカジノなどが閉鎖されることになった。一方、中立モレネで有効とされていたナポレオン時代の民法典において、賭博は不法行為とされていなかった。モナコのモンテカルロの例からもわかるように、カジノの営業が成功すれば観光業の中心として極小国家の経済を支える基盤となりうる。そこで、1903年8月、中立モレネのホテル・ベルガーホーフ (Hotel Bergerhoff) において、カジノの営業が開

53) 19世紀末、ドイツの様々な街がその土地の切手を発行していた。そのような状況に鑑みれば、モリー博士が中立モレネ独自の切手の発行を希望したことも、当然の成り行きであったと考えられる (Bertha 2018)。

始された。Museum Vieille Montagneの常設展示資料によれば、それまでスパのカジノを訪れていた客たちは、毛皮のコートを身にまといリムジンに乗って、こぞって中立モレネにやってきたという。しかし2週間後には、民法典に「国家の承認を受けていない20名以上の集会を禁ずる」という



図13 現在のケルミスのカジノ池

文言があることを根拠として、プロイセンとベルギーの王国弁務官によってカジノの営業は禁止された。なお、現在でもケルミスのカジノ跡地に隣接する池は、カジノ池 (Casinoweier) と呼ばれている (図13 参照⁵⁴⁾)。

4.4.2. 言語的・文化的多様性と中立性

上で述べた通り、独自の郵便切手発行とカジノの設立の試みはいずれも実を結ぶことがなかった。そのような状況下で計画されたエスペラント公用語化の取り組みは、中立モレネを独立した国家として確立するための最後の方策であったと言えることができる。

すでに指摘したように、ドイツ・ベルギーの国境地帯は、伝統的に自然発生的な複言語的傾向が確認される地域であった。特にケルミスでは、中立モレネの成立(1816年)以来、鉱山の労働や兵役の免除を求めて、プロイセン、オランダ、ベルギー、フランスなど様々な国籍の人間が移住し、平和に共存していた。その日常生活においては、当地のケルミス方言に加え、標準ドイツ語、フランス語、オランダ語など、様々な言語が入り乱れていた。このような多言語的・多文化的な社会のあり方は、複雑な言語状況がしばしば観察されるヨーロッパにおいても、とりわけ目を引くものであったと推測される。

中立モレネの住民からは、エスペラント国家の樹立という大胆な提案に対し

54) 2019年8月、筆者撮影。

て、大きな反対や抵抗は示されなかったようである⁵⁵⁾。例えば図 14 に示した 1908 年 8 月の新聞記事⁵⁶⁾では、中立モレネの住民にエスペラントの習得を促すため、「学校で毎週 6 コマのエスペラント講座が開かれており、そのうち 2 コマは子ども (70 名の生徒)、2 コマは成人男性 (40 名の聴講生)、2 コマは成人女性 (25 名の好学者) が対象である」と記されている。この講座は、カール・シュリーヴァー (Karl Schriewer) という中立モレネ在住の若きエスペランティストが無償で提供していた⁵⁷⁾。また、第 4 回世界エスペラント大会においてロイ教授の提案が承認される直前の 1908 年 8 月 13 日には、中立モレネで記念式典が開かれ、独立国家アミケーヨの樹立が宣言されている。この独立宣言は事実上 (de facto) のものではなく、単なる比喩に過ぎなかったと言われているが、中立モレネの住民に加えて、スペインやフランスなど他国のエスペランティストも 100 人ほど参加する盛大な催しであった。彼らが食事のためにホテル・ベルガーホーフに立ち

*** Das Land des Esperanto.** Die winzige Republik Moresnet, das kleine neutrale Ländchen zwischen Belgien und Rhein-Preußen einige Kilometer südwestlich von Aachen, kann sich rühmen, der erste Staat zu sein, der die Pflege der Kunstsprache Esperanto mit allen verfügbaren Mitteln betreibt. Bisher galt die deutsche Sprache als überwiegend, aber jetzt begeistern sich die 4000 Einwohner des Ländchens für das Esperanto und voraussichtlich wird in wenigen Jahren die „neutrale Sprache“ die Landessprache des kleinen Freistaates sein. In der Schule von Moresnet werden wöchentlich sechs Esperantostunden gegeben, zwei für die Kinder (70 Schüler), zwei für die Männer (40 Hörer) und zwei für die Frauen (25 Lernbegierige). Zugleich hat sich eine internationale Vereinigung von Handlungsreisenden gebildet, die Esperanto sprechen und die als Sitz ihrer Organisation Moresnet gewählt haben, als den „Staat“, der als einziger amtlich die neue Weltssprache tatkräftig fördert und zur Umgangssprache zu erhöhen trachtet. Ob es aber durchbringen und die deutsche Sprache verdrängen wird, ist mehr als fraglich. Und wenn auch, dann dürften die durch das Esperanto verfälschten wahrscheinlich vom wallonischen Element des benachbarten Belgiens aufgehoen werden.

図 14 Österreichische Volkszeitung の記事
(1908 年 8 月 18 日)

55) ただし、中立モレネの外部には、ロイ教授の提案 (世界交通の中心地となる施設の建設と、中立モレネのエスペラント国家への格上げ) を非現実的だと考える人たちも存在していた。とりわけ、ベルギーのヴェルヴィエ (Verviers) のエスペラント団体は、この案が無思慮 (unbesonnen) であるとして猛反対していたと言われる。Deutschlandfunk: „Amikejo, Ort der Freundschaft“ – Wie mit Esperanto Staat gemacht werden sollte. [Radiosendung, 12.05.2008] (https://www.deutschlandfunkkultur.de/amikejo-ort-der-freundschaft.3720.de.html?dram:article_id=190076) 参照。

56) Österreichische Volkszeitung. 18. August 1908. S.10. Weltchronik. Warnsdorf (Warnsdorf). (http://anno.onb.ac.at/pdfs/ONB_oev_19080818.pdf) より引用。

57) Dröge (2017: 194) の記述によれば、シュリーヴァーは 1889 年にベルギー、ヴェルヴィエ郊外のアンシヴァル (Ensival) で生まれ、幼少期に家族とともに中立モレネに移り住んでいた。父は VM の工員であった。

寄った際、給仕がエスペラントで応対したとのエピソードも残されている。このことがきっかけとなり、中立モレネではエスペラント講座の受講者が急増したという⁵⁸⁾。

このように 1908 年の時点で中立モレネの住民にエスペラント国家樹立の提案が概ね好意的に受け取られたのは、この地域が言語的・文化的多様性を素地としていることに加え、本提案が当時中立モレネの置かれた状況に照らし合わせても好都合であったためであると考えられる。アルテンベルクの廃鉱によって中立モレネの経済的な基盤が揺らぐなかで、ロイ教授の構想が示唆するまたとない商機は、経済的に自立した国家のあり方を求める民衆の期待とうまく合致したと言えるだろう。さらに、中立モレネはプロイセンとオランダ（1830 年以降はベルギー）の両国に帰属しながら、同時にいずれにも帰属しないと取り決められた中立地帯であった。そのような政治的な中立性は、エスペラントという国際補助語が理念としてもつ中立性と容易に結びついたものと思われる。つまり、中立モレネを国家として確立しようとする際に、フランス語やドイツ語といった特定の民族語ではなく、「誰のものでもなく、誰のものでもありうる」中立的なエスペラントがその統一言語としてふさわしいと考えられたとしても、不自然ではないだろう。

ただし、この奇妙な中立の理想郷をエスペラント国家として独立させるというロイ教授の計画は実現しなかった。1908 年 12 月 27 日には中立モレネで祝祭が開催され、各国から 150 人のエスペランティストが集まった。住民はエスペラントによる演劇の上演、詩の朗読、国歌の斉唱などを行い、この催しを盛り上げたという⁵⁹⁾。しかし、1908 年を頂点として、中立モレネにおけるエスペラント運動は急速に勢力を失っていった。第 4 回世界エスペラント大会では、世界エスペラント協会の本部を 1909 年にジュネーヴから中立モレネに移転する

58) Deutschlandfunk: „Amikejo, Ort der Freundschaft“ – Wie mit Esperanto Staat gemacht werden sollte. [Radiosendung, 12.05.2008] (https://www.deutschlandfunkkultur.de/amikejo-ort-der-freundschaft.3720.de.html?dram:article_id=190076) 参照。

59) 同上。

ことが決定していたが、年が明けてもジュネーヴからの使節は現れなかった。また、中立モレネのエスペラント団体で主導的な役割を果たしていたシュリーヴァーが1909年にベルギー軍へ入隊し中立モレネを去ったことが⁶⁰⁾、運動の衰退の大きな要因であると言われている。その後エスペラント講座は閉講になり、エスペラントの演劇が上演されることもなくなった。

1914年に第一次世界大戦が勃発し、ドイツ軍によってベルギーが侵攻されると⁶¹⁾、中立モレネもベルギーと同様にドイツの占領地域とみなされ、その中立状態は実質的に終了した。第一次世界大戦後、中立モレネの住民は *Belgien vielleicht, Preußen nimmer, Neutral immer* というスローガンのもと⁶²⁾、中立地帯の存続を求めたが、彼らの要求は満たされることがなく、1919年6月のヴェルサイユ条約締結によって中立モレネの領域はベルギーへと編入され、中立状態は正式に解消された。

5. おわりに

本稿では、ベルギーのドイツ語共同体に属するひとつの自治体であるケルミスに注目し、1816年から1919年の103年間にわたってこの地に存在した中立モレネという構成体の特徴について論じてきた。とりわけ、1887年に考案さ

60) 脚注 57)でも示唆したように、シュリーヴァーは中立モレネに居住していたが、ベルギー国籍を保有していた。3.3.2で述べたとおり、当時中立モレネのベルギー国籍者の兵役は免除されていなかった。Dröge (2017: 215–217) の記述によれば、シュリーヴァーはリエージュの陸軍基地勤務を経て、ベルギーの植民地での業務に自発的に志願したという。初めに派遣されたのは中国、天津のベルギー租界であった。彼はここで事務作業に従事していた。その後、シュリーヴァーはベルギー領コンゴへの移動を希望しアフリカに派遣されたが、第一次世界大戦の勃発により、1916年にドイツ領東アフリカで戦死している。

61) 1914年8月4日の朝には、アーヘンからリエージュ街道を通して中立モレネの領域をリエージュ方向に進むドイツ軍の姿が確認されたという。Museum Vieille Montagne, Kelmis 常設展示資料参照。

62) 「ベルギーへの帰属は受け入れられても、プロイセンへの帰属は決して受け入れられず、中立を希望することは言うまでもない」の意である。Museum Vieille Montagne, Kelmis 常設展示資料参照。

れたエスペラントをいち早く中立モレネの公用語として採用しようとしたヴィルヘルム・モリー博士とギュスターヴ・ロイ教授の取り組みに焦点を当てた。彼らの構想は結局実現することがなかったため、この事例は一般にあまり知られていないが、小さな田舎町に生じた特異な出来事として位置付けるのではなく、この時代のより大きな文脈のなかで捉える必要があるように思われる。すでに言及したように、20世紀初頭のヨーロッパでは、国際的な鉄道網の敷設やマスメディアの発達によって、人間や物資の移動が促進され、情報流通の速度も高まっていた。このようにますます複雑化する言語状況と国際関係のなかで、人々の相互理解をはかり、ことばによる不平等や不公平を回避するための方策として国際補助語のエスペラントが切望されたことは、この時代を象徴する出来事であったと言えるだろう。ケルミスという小さな町が辿ってきた近代の歴史を通じて、現在のヨーロッパの複言語主義の原点とも言うべき事例を知ることができたのは有意義であった。今後機会があれば、当時の新聞記事を包括的に検討し、中立モレネの個々のエピソードに関するより詳細な調査を行いたいと考えている。

参考文献

- ABEO Ostbelgien (2011) *Sammelmappe Sozial- und Wirtschaftsstatistiken für die Ostkantone und die Deutschsprachige Gemeinschaft Belgiens*. Eupen.
- Ammon, Ulrich / Bickel, Hans / Lenz, Alexandra N. (Hrsg.) (20182) *Variantenwörterbuch des Deutschen. Die Standardsprache in Österreich, der Schweiz, Deutschland, Liechtenstein, Luxemburg, Ostbelgien und Südtirol sowie Rumänien, Namibia und Mennonitensiedlungen*. Berlin: de Gruyter.
- Becker, Ulrich (ed.) (2010) *Esperanto in The New York Times (1887-1922)*. Mondial: New York.
- Bertha, Alfred (2018) „Notizen zur Postgeschichte von Neutral-Moresnet.“ In: Vereinigung für Heimatkunde, Geschichte und Kultur im Göhlthal (Hrsg.) *Sonderausgabe „Im Göhlthal“ – Rückblick Neutral-Moresnet*. Kelmis.
- Dithmar, Wilhelm (2018) „Ein Esperanto-Staat ehemals in Neutral-Moresnet?“ In: Vereinigung für Heimatkunde, Geschichte und Kultur im Göhlthal (Hrsg.) *Sonderausgabe „Im Göhlthal“ – Rückblick Neutral-Moresnet*. Kelmis.
- Dröge, Philip (2017) *Niemandsland – Die unglaubliche Geschichte von Moresnet, einem Ort, den es eigentlich gar nicht geben durfte*. München: Piper.
- GRECC (= Groupe de Recherches et d'Etudes sur la Communication Culturelle)

- (Hrsg.) (1990) *Grenzland seit Menschengedanken. Identität und Zukunft der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens. Biblio-Kassette 3 : Sprache und Gesellschaft*. Eupen: Grenz-Echo Verlag.
- 黒子葉子 (2017) 「ベルギーのドイツ語共同体——国境を超えたドイツ語圏の広がりへの把握に向けて——」 In: 『獨協大学ドイツ学研究』 第 73 号. 29-55 頁.
- 黒子葉子 (2018) 「国境地帯における言語状況の変遷に関する一考察——ベルギーのドイツ語共同体を例に——」 In: 『獨協大学ドイツ学研究』 第 75 号. 1-24 頁.
- Neuß, Elmar (2016) „Wie die modernen Schriftsprache die älteren Schreibsprachen langsam verdrängten. Fragen zu einem bisher kaum beachteten Forschungsfeld an den Sprachgrenzen.“ In: Lejeune, Carlo (Hrsg.) *Grenzerfahrungen. Eine Geschichte der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens. Band 2*. S.224-237. Eupen: Grenz-Echo Verlag.
- Malvoz, Louis (1983) „Das neutrale Gebiet von Moresnet (1816-1919)“ In: *Gemeindekredit von Belgien, Nr. 144*.
- Ministerium der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens (2019) *Ostbelgien in Zahlen. Stand 2019*. Eupen.
- Möller, Robert (2017) „Im Zeitalter der Nationalsprachen. Sprachentwicklung im politischen Grenzraum zwischen Maas und Rhein.“ In: Lejeune, Carlo (Hrsg.) *Grenzerfahrungen. Eine Geschichte der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens. Band 3*. S.230-251. Eupen: Grenz-Echo Verlag.
- Parlament der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens (2016) *Die Deutschsprachige Gemeinschaft und ihr Parlament*. Eupen.
- Pauquet, Firmin (2018) „Referat gehalten am 20. September 1969 beim Festakt zur 50-Jahrfeier der Wiedervereinigung des streitigen Gebietes von Moresnet mit Belgien.“ In: Vereinigung für Heimatkunde, Geschichte und Kultur im Göhlthal (Hrsg.) *Sonderausgabe „Im Göhlthal“ – Rückblick Neutral-Moresnet*. Kelmis.
- Pirlot, Germain (1990) *Blick auf Neutral-Moresnet 1816-1919. Deutsche Ausgabe der ersten Auflage Esperanto-französisch, die 1987 herausgegeben wurde*. Oostende.
- Reybrouck, David van (2017) *Zink*. Berlin: Suhrkamp.
- Schroeder, Ferdinand (1902) *Das grenzstreitige Gebiet von Moresnet s.g. Neutral Moresnet. Eine Studie. Materialien und Rechtsgutachten*. Aachen: Rudolf Barth.
- Schmitz, Nikolaus (2018) *Galmei und Schalenblende aus dem Altenberger Grubenfeld bei Kelmis / La Calamine*. Aachen: Shaker Verlag.
- 田中克彦 (2007) 『エスペラント——異端の言語』 東京: 岩波書店.
- Wintgens, Leo (1986) *Grundlegung einer Geschichte der Literatur in Ostbelgien. Bild der sprachlichen Wechselwirkungen im Zwischenfeld*. Eupen: Grenz-Echo Verlag.
- ザメンホフ, L.L. (著)、水野義明 (編・訳) 『国際共通語の思想——エスペラントの創始者ザメンホフ論説集』 東京: 新泉社.

参考資料

Gemeinde Kelmis (Hrsg.) *Zur Geschichte von Neutral Moresnet 1816-1919*.

参考記事

Neues Wiener Journal. 12. Februar 1908. Wien.

http://anno.onb.ac.at/pdfs/ONB_nwj_19080212.pdf

Österreichische Volkszeitung. 18. August 1908. Warnsdorf (Varnsdorf).

http://anno.onb.ac.at/pdfs/ONB_oev_19080818.pdf

参考ウェブサイト

Das Kulturportal der Deutschsprachigen Gemeinschaft Belgiens. <https://www.ostbelgienkulturerbe.be> (最終閲覧日：2019 年 9 月 11 日)

Deutschlandfunk: „Amikejo, Ort der Freundschaft“ – Wie mit Esperanto Staat gemacht werden sollte. [Radiosendung, 12.05.2008] https://www.deutschlandfunk-kultur.de/amikejo-ort-der-freundschaft.3720.de.html?dram:article_id=190076 (最終閲覧日：2019 年 9 月 20 日)

Deutschlandfunk: Neutral-Moresnet – Geografisches Kuriosum am Dreiländereck. [Radiosendung, 05.07.2015] https://www.deutschlandfunk.de/neutral-moresnet-geografisches-kuriosum-am-dreilaendereck.1242.de.html?dram:article_id=324550 (最終閲覧日：2019 年 9 月 20 日)

Belgischer Rundfunk (BRF) : Neutral-Moresnet – ein Kuriosum europäischer Geschichte. [Radiosendung, 15.01.2016] <https://brf.be/regional/954037> (最終閲覧日：2019 年 9 月 20 日)

Österreichische Nationalbibliothek, Sammlung für Plansprachen. <https://www.onb.ac.at/bibliothek/sammlungen/plansprachen> (最終閲覧日：2019 年 9 月 20 日)